

会 議 録

会議の名称	第3回西東京市図書館計画策定懇談会
開催日時	令和5年6月21日（水）午後2時から午後4時まで
開催場所	イングビル 3階 第3会議室
出席者	【委員】 小西委員、島委員、石井委員、鈴木委員、大塚委員、小田委員、 長谷川委員、山辺委員、ギログリー委員、徳山委員（図書館長）、 司城委員（副館長） （欠席）伊尻委員 【事務局】 金本庶務係長
傍聴者	0名
議 題	第1 これからの図書館の方向性について（案） 第2 その他
会議資料の名称	資料3－1 西東京市図書館の利用に関するアンケート （選択以外の入力・自由意見）15歳以上 資料3－2 西東京市図書館の利用に関するアンケート 15歳以上 クロス集計グラフ 資料3－3 西東京市図書館の利用に関するアンケート 小学生アンケート結果グラフ 資料3－4 西東京市図書館の利用に関するアンケート 小学生アンケート結果自由意見 資料3－5 西東京市図書館の利用に関するアンケート 中学生アンケート結果グラフ 資料3－6 西東京市図書館の利用に関するアンケート 中学生アンケート結果自由意見 参考資料 図書館施設の現状分析・課題_課内検討結果_図書館計画・公マネ対応 参考資料「図書館施設の現状・課題についての課内検討に対する意見」まとめ 参考資料 これからの図書館について（課内意見） 参考資料 中野区「図書館の新しいあり方」 情報提供「練馬区教育委員会これからの図書館」「練馬区これからの図書館構 想策定検討委員会報告書」
記録方法	☐ 全文記録 ☒ 発言者の発言内容ごとの要点記録 ☐ 会議内容の要点記録
会 議 内 容	

○座長

第3回図書館計画策定懇談会を始める前に、第2回図書館計画策定懇談会の会議録の案が来ているので、前回までと同様に確認をお願いします。各委員には電子メールで本日送付、今月末を締め切りとする。

○座長

館長より議事の趣旨説明をお願いします。

○館長

前回に続き、これからの図書館の方向性について（案）ご協議いただきたい。
配布資料を確認する。

（資料3-1から3-6まで確認と説明、参考資料の説明）

○座長

館長からこれから協議する「これからの図書館の方向性」についての参考資料と、趣旨について説明いただいた。懇談会の最終目標は、「西東京市図書館計画」の来年度から5か年のものを作ること。市の総合計画や教育計画という上位の計画が同時進行で策定されている。図書館計画を考える時に、方向性もある程度同じでないと行政としては、少しいびつとなるため、総合計画や教育計画の方向性を踏まえた上で計画を立てたい。

図書館計画の方向性についてまとめて8月には提示できるようにする。この懇談会では図書館の意見をたたき台としながら議論する。その前に、図書館のあり方、今日示された資料の中にあるように、施設計画で言うと、五つぐらいのパターンで現状維持型、あるいは、大きな中央図書館を建てて中央館分館体制、そういうことが協議会等で議論されている。次回以降、今までのご議論をお読みいただいた上で、追加の議論をする。今日はまず、西東京市図書館についてどんな図書館が望ましいか、10年20年もっと先まで私どもが求める図書館、市民が求める図書館はどんな形態であるべきか、皆さんから自由なご意見をいただきたい。

○館長

参考資料「これからの図書館について（課内意見）」について説明。

○座長

西東京市図書館が将来にわたってどんな図書館であってほしいか、自由にご発言いただきたい。

○副座長

新しい図書館計画を作るという点で、大きく分けてハードとソフトがある。ハードとソフトというのは密接なつながりがあるが、8月中にある程度の形をつくるとすると、ハードのところを優先して話した方がいいと思う。一番大きいところは、中央図書館の問題。気になるのは、館長のお話で出た中学校区、いま、中学校はいくつあるか。

○館長

現在9校ある。現行の図書館計画に半径円の1キロ範囲のものがあ、重なるところもある。理想は円が重ならず、中学校区でという考え方を汲みつつ、適正に配置をしていくことと思う。

○副座長

ハード面をみんなで議論するのはどうか。特に、中央館を中心に議論をしたい。

○委員

とりあえず、施設を中心に優先して話をして、行政のものにとらわれずに、皆さんが意見を言われた方がいいのではないかな。その上で、皆さんが納得したところで行政との付け合わせも当然ででてくるかと思う。まずは自由に議論ができたほうがいい。

○座長

実現不可能な夢を語りあうことはできないが、一つの大きな中央館を中心として、補助的な小さな分館という考え方や、現状のように、中央館機能は弱いがほぼ、同じような館が6つある考え方。あるいはその他のバリエーション、利用者の立場として、あるいは市民の方を想像して、これでいいのか、そういう観点からご意見いただきたい。

○委員

古い発想で、移動図書館がある自治体は少なくなっているかもしれないが、空白の部分が現実にあるわけで、そういう思い切った話も素材にすると議論がおもしろくなるという提案をしたい。

○座長

ちゃんとした建物を前提として、こうあらねばならないと縛られずに、移動図書館というような構想も、もしそれが機能するように運営できれば選択肢の一つ。今まで皆さんが体験された図書館、自分が使ってきた図書館の記憶に比して、西東京市の図書館は、それを満たしてくれているのかどうか、そういった観点でもよい。

○委員

私も会員の「子どもの読書勉強会」というサークルが発足した50年前、当時の保谷市には図書館がなく、公民館が窓口となって、地域のお母さんグループ10か所に100冊ずつ本を渡し、それを順に回していくという文庫活動していたそうだ。活動が活発になる中で、「図書館がほしい」という気運が高まり、図書館のできるきっかけとなった。当時の文庫活動をしていた方の集まりが「子どもの読書勉強会」の始まりだと聞いている。

今は親子共にとても忙しい人が多い。図書館のおはなし会に小学生がなかなか参加してこない。代わりに、小学生がいる児童館とか学童クラブに本やおはなし会を届けることはできるのでは。子どものいるところに本を持っていく発想は必要だと思う。この先、電子書籍が便利に活用されていくとは思いますが、紙の本を手にとって、重みを感じて、においをかいで、ページをめくるなど、いくつもの体感をすることが、記憶する力を高めるとも言われている。子どもにとって、本を体感する場所がいっぱいある方がいいと思う。本がある場所にいるだけで本の力は感じられる。読んでみたい時にすぐに手に取れる本がたくさんある場があること。家庭に多くの本を置くのは条件がないと難しい。図書館や子どもの集まる場所に、いつでもアクセスできる本がある環境は、公的に整えていくべきと思う。児童館の図書室は、館によって雰囲気がだいぶ違うが、子どもには居心地の良い場所。小学生への直接的な働きかけを考えると、先ほどのコンクールは素敵だと思うし、定期的に児童館でのブックトークなど本を紹介する仕組みを考えたら、子どものいる場所で本と子どもがつながるきっかけはできると思う。

学校司書の方との連携も一層進めてほしい。だが、館内のご意見にもあったが、学校図書館と市の図書館を複合するのは簡単なことではない。学校図書館の目的、市の図書館の目的が違うので、複合すればいいものが作れると安易に言わないでほしい。古くなる学校を何とかしないといけなからという発想から複合化を進めるのだと、かつての3館合築の話に近いことにならないか。現在更地の保谷庁舎跡地がどのように活用されるのか、将来的な方針

は未定と伺っているのですが、保谷庁舎跡地に新中央図書館ができるといいと思う。現在の図書館6館を中学校と同じ数の9館に増やすのは難しそうと思うが、新中央館が立派なものになるから、近所に図書館がなくなってもいいとはならない。子どもやお年寄りが歩いて行ける場所、また病院やいろんなところに本があることが大事と思う。今、図書館がある場所が歩いて行ける距離を考えて建てられてきたことを考えると、数や場所の基本になると思う。新中央図書館はできれば単館で建て、地域館については、サービスが歩いて行ける場所に届くような形で、どんどん減っていくということがないようにと思う。

○座長

一つはきちんと力を発揮できる中央館があったらいいというハード面。もう一つは児童館や学校図書館など子どもたちが集まる場所にきちんと図書館の手が届く本を配置して、図書館活動ができるようにコーディネートしていくべきだということ。図書館側の力、ソフト力というか図書館員をちゃんと増やして、そして、学校図書館に適切な援助ができる図書館員を配置して連携する。また、いろいろな本を市民に届ける場所を確保して連携を図る。きちんと図書館として力を持つようにと伺った。

ハードの面を少し先に議論していったら、副座長のお話の中で出てきた図書館の力の部分、源泉の部分については、どういう図書館の体制でなければいけないかということは議論していきたいと思う。委員が口火を切ってくくださったように、日本の公共図書館について、1970年ぐらいから東京都の公共図書館というのは発達する、その前には委員たちがおやりになっていた文庫活動、おそらく、東京には300ぐらいの文庫活動があったのではないかな。それは、副座長の方が詳しい。そういうものが基礎にあって図書館があるところではちょっと対立した活動もあったかもしれないが、子どもに本を届けるという機能が公共図書館の方で成立していったのではないかと受け止めている。文庫活動というのが、石井桃子さんが『子どもの図書館』にまとめておられるように、日本の図書館の原点だと思っているが、委員がおっしゃったことは、ひとつ先祖がえりじゃないけど、それを図書館がきちんとコーディネートしていったらどうかということだと思う。

○委員

個人的なことと言えば、今の状態の図書館にはとても感謝していて、今後こうなったらいいなというのを見つけるのが難しいぐらい満足しているが、他に付き合いがある人と話していて、なぜ、あまり行かないのか、行ったけれども続かないのかというのを聞くと、自転車が止めにくいとか、車で行けたら行くけどというお話があることがある。さきほどもお話が出ていたが、私も自分が行きたいなと思った時に身軽に徒歩で行けて、小さい子も自分で、お母さんと一緒に歩いて行けて、達成感も得られるし、小さくてもいいから数多くいろんなところに図書館があってくれたら素敵だなと思う。

しかしそうすると、今度は人員の問題が出てくるし、手薄になるとか、職員が信用ない人になってしまったとか、そういうのになるようであれば、きちんとした施設が、数は少ないけれどもあるっていう方がいいなと思う。ただ、そうすると、住んでいる場所によっては、アクセスが悪いので、どうしても自転車や車で行く。本というものが重いこともあり、借りてくるのならどうしても、徒歩だけでは難しいということになると、駐輪場や駐車場が充実しているとありがたいなと思う。郊外のショッピングセンターのように、広い駐車場なんかがある状態だったら、いろんなことをしながら日々の行動の一つに図書館をと入れられると思うことはある。

だいぶ前、機械で貸出しができるようになった辺りで、利用者が、職員と接する機会が減ったことで話しかけにくくなった時期があり、どうしても返却や貸出し、それをするためだけに職員と接するわけで、多少お顔を覚えたりもするし、そのついでに質問したり、本の感想を言ったりするのがあるところが、なくなってしまい、ただ、図書館側の意向としては、

そういった処理に時間をかけない分、利用者さんのニーズに応じて相談にのったり、本と一緒に探したりというところに手がかけられると考えていると思うので、そういうふうに、助けていただいたことがたくさんあるので、ただそれが、利用する側に伝わりにくいようなことがあって、子どもだとなおさらで、図書館に行けばなんでも調べられる、教えてもらえるって思っているが、誰に聞けばいいのか分からなかったとか、忙しそうだったということになるので、ぜいたくな話だが、窓口があって、実は職員は何か入力業務でもいいのだが、何かやっていたら、コンシェルジュのような感じで、話しかけやすい状態にいるっていうそういう作りがあるとうれしいなと思う。

○座長

自動貸出は、職員の手間暇の効率化の面もあったが、それがきっかけでカウンターと利用者の接点が少なくなったかというところだけではないような気がしている。ほかの地域は、業者さんがカウンターを発注して、ちょっとそういう意味では市民との距離があるとか。その辺は皆さんいかがか。

○副座長

多摩地区や23区では中央図書館がどんどん大きくなり、5,000㎡とか6,000㎡とか7,000㎡ぐらいまで大型化している。それに伴って、市民と図書館員の距離が取りづらくなるという問題が出ていると思う。

施設だけでなく、自動貸出機がある。それは職員と市民との距離を隔てるものになっている。以前の図書館であれば、職員は子どもの名前を覚えて仕事できた。ところが今は、なかなか図書館員が子どもの名前を覚えられない。コンピュータ化があって、図書館が大型化をして、そして自動貸出機が入って、そういうところで子どもと図書館員の距離が離れていった。大型化などを否定しているのではなく、そうであるならば子どもと図書館員の距離を短くするプログラムが必要であると思う。

例えば、「子ども司書」とプログラムがある。小学校の3年生4年生で20人30人の定員制で、1年間のプログラムを組む。今日は、本の紹介をしますとか、読み聞かせをしますとか、街探検をしますとかプログラムを組む。図書館によっては「子どもクラブ」という言い方をしている。図書館員と子どもの距離を縮める工夫が必要だと思う。冒頭の館長が報告された調べ学習も同じような視点だと思う。そういうプログラムを組み立てていく必要が新たにあるだろう。

○委員

コンシェルジュという話があったが、施設によって違いうだろうけど、例えば田無で開館したときに児童コーナーがあったが、入り口のところに人を配置し、いわゆるサービスカウンター。田無の図書館は、最初からコンピュータのようなものを使って日本で初めての試みをして、それでも、子どもたちがカウンターにぶらさがってきてくれたわけですね、当時は。それでもやはり、ひとつ、サービスカウンター、相談カウンター、いつもそこに職員がいるという、施設の関係もあるので、そういう、機械化された部分と、もうひとつ別口にどなたでもどうぞご質問ある方はどうぞと、もちろん人の問題、人の質の問題も出てくるかもしれないが、やはりそういう場所がこれから先、求められてくるかもしれない。そうしたらもう一度は職員の数が倍に増えるかもしれない、そういうものを求めていくというのはここでもいいのではないかな。それが実現するかしないかはとても難しいかもしれないが、そういう忌憚のない意見を言われた方がより、皆さんが意見しやすくなると思う。

○副座長

児童用のカウンターは最初からなかったのか。

○委員

はい、ワンカウンター。でも、一つはそういうものを作ろうと。でも、人の配置ができなかったという現実あったのだけれども、こういう構想はあった。常時、配架しながらきちんと利用者とコミュニケーションできるとまた違ってくるかもしれない。利用者の方が、遠慮してなかなか声がかけられないという現実はやむを得ない。もっと利用者が、積極的に職員とつなげるような、あるいは、突然、利用者が入ってきて、職員が配架していれば、「何かお探しですか」と職員が声をかけられる。また、違った良いコミュニティができるかなと思う。

○委員

先ほど、座長が、これまで使った図書館でよかったところはどこかと言われたが、豊中市の野畑図書館(3846㎡)が、大好きだった図書館だと思い出した。ワンフロアで、建物の真ん中にカウンターがあって、半分児童、半分一般書の感じ。目の端に子どものいる場所を見ながら、大人は反対側で自分の本を探せて、子どもが勝手に出ていきにくい構造になっている。大人の場所と子どもの場所が、緩やかにつながっていて、住み分けている。子どもがこっちでちょっと騒いでも、大人の方に被害はないし、微笑ましいと思ってみられるだけ余裕のある場所。カウンターの雰囲気も図書館員に相談をするのが非常にしやすい図書館だった。西東京市図書館員にもこんな本を探していますとか、この続きはどこにあるのでしょうかと尋ねれば、本当に立ちどころに探してくれるが、野畑図書館は各種相談に乗るのが仕事、という人がいたように思う。そこは坂の上なので、歩きや自転車で行く人、車で行く人の両方がいた。たくさんとは言えないが、それなりのスペースの駐車場もあった。ただ豊中は現在、図書館配置を見直しているそう。特別大きな中央館を作る代わりに野畑図書館なども縮小されようとしている。どういう図書館を望むのか、各地で市民が一所懸命考えている。

○座長

今のお話は、ひとつは、大きな中央図書館の構想はあっても、他の委員がおっしゃったアクセスビリティというか、駐車場をちゃんと完備する面も必要。図書館をどういう作り方をするか。今、はやりなのはゾーニングという言葉だが、子どもたちが少し騒ぎながら学習ができる一方で、静かに読書できる場所もある。さいたま市立中央図書館では子ども室のところは、透明で、見えるけれども防音している構造になっていた。ワンフロア6,000㎡という巨大な空間にゾーニングを取り入れていた。

ある程度しっかりした中央館がほしいよという意見がある程度多いのでしょうか。それをまず聞かせたい。

○委員

多いと思う。

○座長

これまでの議論でもそういうことになるだろうか。

小さな魚がいて立派にやっているというのと、ビシッとした鯛がいる、ちょっと例がまずいかかもしれないが、小さな図書館でも立派にやっているというのと、ビシッと大きな図書館とどちらだろうか。

○委員

鯛でなくてもいいが、大きな魚がいて、スイミーもいるみたいな、そこそこ大きな図書館

があり、小さな図書館もがんばるという感じがいい。今の中央図書館はすこし残念。

○委員

スペースの絡みで言えば、図書館が市民の図書館として、立ち上がってくるのが60年代中ぐらいから。特に70年代ぐらいに入って、東京都の当時の知事が図書館振興施策を作る。それによって、最初にそれにふさわしい図書館というのが、日野市の図書館。面積を見ていただければ、当時中央図書館は2100㎡というような見方をしていた。73年に図書館諮問委員会ができたが、図書館構想で、公民館併設になる。ここの施設はあくまで図書館建設事業として、最低でも、2100㎡ぐらいの中央図書館はほしいなと思っていた。

日野市の場合は、移動図書館が先に走っていた、そういう歴史的な経緯があって、そのあと、福生市はできた時にローラースケートでもはかないと、という規模の図書館。そういう歴史的なものがあるので、中央図書館の規模がどのくらいというのはなかなか難しいという判断ではあるが、とにかく、先ほどのように4,000㎡とか5,000㎡とか6,000㎡だというような規模になってきてはいるけれども、それはいいかどうかは置いておいて、そんな歴史があるということを抑えた上で、本当に自分たちが、理想の西東京市にふさわしい図書館の規模というのはどんなものかということを考えていかれたらいいのではないだろうかと思う。

そういう歴史の中で、あえて古い話だが、移動図書館もハードですから、先ほど委員がおっしゃったように、保谷の話が出ましたけれども、文庫の話、そういうものを含めてともかく、身近なところに当時はポストの数ほど図書館をというメッセージがあった。そういうものに向かって、子ども文庫なんかもそれ相当の図書館としての位置づけで動いていたという現実を 規模がどれだけ難しい、そんな歴史を踏まえたうえで、西東京市の図書館をイメージしていただけると嬉しい。

○座長

今、お話に出ていた日野の図書館、新館ができたのが1973年という、日本図書館協会の理事長をされている植松先生、図書館建築の専門家。この方の図書館建築の本を読むと、戦後すぐの八戸市立図書館の図面が出てきて、その時は、閲覧机があって、椅子が並んでいる、閲覧机がずっとあって、そうすると、1973年の前川さんの日野の図書館は、もう、とにかく、市民が求めるその本を届けることということで、建物なんていらないとまで仰っている。おそらく、いろんな怒りも込めて、図書館活動をするのに、図書館という建物がなくてもやっていけるのだと極言するぐらい活動を重視されて、その時はもう八戸に比べると、日野の図面ではもう8席ぐらいしかなかった。ほとんど座ってなんかいない。とにかく、本を借りて、調べものをして、お帰りになる。そういう構造。

それから、何十年もたって5,000㎡ぐらいの中央館というのが全国的に普及した。20万都市だったらそのぐらい広さは当然だが。そして現在は、「場所」ということも言われるようになったから、本を読む場所もきちんと確保した形というのが出てきているのではないか。今の西東京市図書館は、世間一般の中央館という考え方ではなく、言ってみれば1970年代の貸出できれば図書館だよと言っていた思想で作られた地域館が6つあるということだ。時代区分で言うと70年代の思想で作られていると思う。絶対だめだというのではなく、21世紀の今、私たちの市民にとって望まれる図書館というのがどんなだろうということになる。古いかもしれないけど移動図書館車を走らせたっていいという発想も出てくる。

○委員

図書館は滞在型としての居場所を保障しつつ、様々な機能については、移動図書館のようにアウトリーチするなど、子どもを含む多様な相手への働きかけとしてプログラムを実施することが重要だと思う。そのためには、ハード面の検討は、機能と同時並行でないと考えら

れないのではないか。ハード面では、居場所滞在型のためには、多様な地域資料などの保存閲覧、デイジー図書等の保存活用など様々な面を考えると、ある程度の規模が必要になる。さらに、徒歩圏にあるべきということと同時に車や自転車でのアクセスを可能にするには、別途スペースが必要で、駅の近くというのは難しい。市内では、保谷庁舎の跡地が候補に挙がっているが、交通の便が悪いので、工夫が必要だ。また、滞在型の図書館は、周囲に木々の緑があるなどスペースに余裕が必要だろう。図書館の様々なプログラムを実施するには、事務方のスペースも必要なので、建物自体の広さはもちろんだが、周りにある程度のスペースを確保する必要がある。

自分自身の経験を振り返ると、転勤族で、子ども3人を育てながら、全国の図書館に行ってきた。就園前の子育て時には、専業主婦として平日の午前午後など、図書館をかなり活用したが、これからの時代は、働く人が増えて、平日の昼間に人が集まるかと言うと、なかなか難しい。ただ、フレックスなど働き方もいろいろ変わってくるので、そこも考えておく必要がある。西東京市の図書館は、早い時間の開館を望むシニアの声を受けて、開館時間を前倒ししたが、シニアの人たちも働かないと世の中が回らないという声もある。そう考えた時に、ウィークデーの居場所になる人と、週末の居場所になる人の対象も違うだろうし、子どもたちの居場所と想定しても、年齢によって思考パターンも行動範囲も変わってくる。小学校高学年や中学校低学年ぐらいは少し近くて簡単に行ける場所を今の地域館ぐらいの規模やそれより小さい規模でも、あればよいと思う。

多摩地域の駅のすぐ近くに、市の簡単な住民サービスと予約していた図書の受け取りのカウンター窓口がある。便利な場所で、他のサービスと組み合わせれば、空白地域の問題はある程度対応できるかもしれない。

過去に視察させていただいた板橋の図書館は駅近にあってすごく活用されていて、あれは、大人の居場所になっていたが、西東京市の場合は駅近というのは難しいと思う。

○座長

新しいところか。

○委員

板橋区立中央図書館、見学させてもらった。一昨年できたところ。

○委員

板橋の図書館は、西東京が望むものではないと思う。駅の近くの図書館、例えば武蔵野プレイスがベストかと言うと西東京市に当てはめた場合、少し違う気がする。以前視察した中では、多世代の居場所になっていて生活の場と近い雰囲気があった「ゆいの森あらかわ」がベストかもしれない。よく話題になる武雄市の図書館にも行ったが、地域の人も旅行者のような人も楽しそうに来ていた。建物自体はおしゃれで、子どもだけのスペースもあり、居心地はよかったが、書棚がすごく空いていて、図書館の基本機能には疑問が残った。西東京市は西東京市で地域の誇れるものの一つとして、縄文遺跡とかシンエイ動画とかを挙げているが、地域の誇れる場所としての図書館がほしい。

○委員

8月末くらいまでに一定の目途をつけるとなると、ハード面に話を進めることになる。ソフト面の取り組みを充実させ、進めていくためには、現状のスペースでは限界がある。例えば保谷庁舎跡地を利用して、図書館にプラスしてショッピングセンターとか駐車場を併設するようなプランを提言すれば、いろいろな方の意見が出てくるのではないかな。

○副座長

ロンドンのタワー区では、「アイデアストア」という名称で新構想図書館、ネットワークを考えた。図書館と生涯学習センターが一つの建物に入り、場所により市役所の出張所、フィットネススペースも設置されているようだ。多くの場合、ショッピングセンターの側に設置され一体化しているようだ。そんな事例もある。

○座長

イタリアも、そう。歴史的建造物とアーケード街とくっつけて、図書館を作っている。

○館長

多摩地域の館長が集まって行う研修があるが、先日、北欧の図書館について学ぶ機会があった。北欧は福祉の部分がとても根強いところで、職業訓練も含めて図書館の中にあり、片隅に相談室があり、カウンセリングの場所もありと紹介があった。教育部の枠ではなくて、障害福祉や高齢者福祉、その他のつながりが図書館は他の部署と違ってできるのかなと感じている。

先ほど、委員からのお話にあった、自動貸出機や予約棚を設置したことで、その分職員がフロアに出て、利用者に声をかけることができるだろう、ということで進めてきた。それが一番の狙いだったというところもある。

○座長

こういうことを、全部実現できる可能性はないわけではない。巧みの改築の極小住宅をどうしようとか。あのようなもの見てみると、たぶん、こういうところに頼むと、大した広くない図書館も、今、館長のご希望も叶える。つまり、あきらめてはいけない。それこそ、音楽発表の場として図書館なんていうものをやっているところは結構あるのではないだろうか。

○委員

かなり前だと思うが、コンサートをしていた記憶がある。そうした試みは、これまで図書館に足を運べなかった人を呼び込むことができる。中央図書館について、気づいたことだが、小学生アンケートの結果、自由意見というところで、資料3を読んだけど、地域のアイデンティティというのがあった。

あと、中央図書館で、バナー広告について。他の図書館にもあるのかと、思って調べてみた。西東京では年間アクセスが420万件あり、他の図書館では例えば府中市とか、板橋区立とか土浦市などにはいろいろな審査基準や、いつまでに申請してくださいなど条件がある。

○座長

バナー広告の件は今いかが。

○館長

バナー広告、図書館のトップページの左側に、あと下の方にもある。正直申込数は多くなく、西東京市でも審査がある。

○委員

例えば、市報に変わった経緯を載せる欄を作ると新しい展開になるのでは。

○館長

市報掲載は、担当課と応相談ということになる。

○委員

図書館が耐震補強をして、今日のお話だと中央館、地域館というある程度の分担で、地域館は駅前に密着して、利用しやすいところで、移動図書館はちょっと置いておいて、中央館はしっかりある程度面積をとって、地域資料、あるいは専門資料をきちっと保存活用できるような規模がほしい。駐車・駐輪スペースもほしいというようなところでイメージが豊かに出てきて、ただ、市の総合計画の中にやはりこの図書館計画策定懇談会としては、図書館は根幹ですから、その市の文化レベルを示すのは、ある意味図書館なので、住みやすい西東京みたいなのをきちっと作るために、こういう中央館が必要だという提案はした方がいい。市の総合計画ができてから入れてくださいというのはハードな部分は絶対に難しいですから、やはり中央館が、地域の特性としても果たすような役割をやはり提案した方がいい。館長にとっては、負担が大きいけど、言うべきことは言わないと、何のために懇談会があるのか、分からないということになるので、その中で、ソフトの面、学童保育のこととか出てきたが、時代が変わって、子どもたちがなかなか集まらないのであれば、どういうところにニーズがあるのか、一番大きな話は、中央館がやはり20万の街としてはやっぱり必要で、それが、今、大事な時期に来ているということが、皆さん一致する意見なんじゃないかなと思っている。

○委員

今、地域行政資料室があって、当然市は議会図書室があり、その辺りのことをひとつ、国会図書館がリアルな議員のためのという話をしている。議会図書室がどのような形で運営されているか分からないが、本来なら議員が調べ物をした時に、きちっと対応できるような職員がいらないといけない。その辺りのことを、含めて、一つは、地域行政資料室は、もっときちんとした、西東京市のことは西東京市の図書館が責任を持つというメッセージを常に持っていないといけない、それから、もう一つは、郷土資料室がありますけれども、社会教育課の所管で運営されているが、下野谷遺跡というようなその辺りの絡みの中で、そういった博物館みたいなものと、図書館がどのように絡みができるかなということも。一応、施設というような部分で言えば、押さえて話ができるという。

昔、地方小出版流通センターというのがあって、例えば、東村山市の図書館では図書館が出版の事業をした。縁（ゆかり）の絡みで、そういうハードの部分ではないが、地域行政資料室としての、役割として、地域の人たちを掘り起こして、出版事業があってもおかしくはない。

○委員

文化財の保護市民委員をやっている、今、西原に郷土資料室があって、学校跡地を利用して展示施設にしているということで、一方、下野谷の国指定遺跡になったので、今、復元の住居を作っていて、博物館どうするか向こうでは話題になっている、図書館はどこでもあるが、西武池袋、新宿線の沿線だと、練馬とか清瀬とか東村山とか博物館を持っている自治体と持っていない自治体があって、ここは保谷も田無も西東京市にはなかった。それで、下野谷の絡みで、何かできないかということで、文化財保護審議会は、地域図書館というか、場合によっては縄文に特化したところで、国のお金とかそういったものも、できないかということとは話題にはなっているが、そこに一步踏み出せないということで、ただ、公共性そのものからいうと、図書館の方がはるかに市民のニーズが日々の利用が高いので、その連携が見つけられれば、特に地域資料とかそういったものが今、きちんと土器は向こうで、資料文献はこちらとなっているから、上手にできると西東京の中でも外でも見やすい形になるか。

○委員

下野谷遺跡のところに施設を作るわけにはいかないから、そういうものを含めて、先ほど社会教育課と文化財保護審議会との調整の中で、図書館と博物館が一緒になったっていい。

○座長

今の意見もそうだが、いずれにしても、相応な規模の中央館をとというのがこの懇談会の一つの議論の中心になっているかと思うが、次回、この懇談会としての方向性をここで意思を固めていこうかと思っているので、そのためには、今日出ている資料等は皆さんお読みいただいて、いま、2人の委員から出されたように、中央館というハード面を考えていくとしても、公民館とか、他の文化的な機能を持つところとの関係もきちんと位置付けておかないと、この懇談会として、市の総合計画等に向かって、他との関連性をきちんと整理して、場合によっては、垣根を無くしてもいいかもしれない。そういう発想も、次回もう一度議論をしてまとめていきたいと思うので、こういう方向でよいかな。

次回も自由にご議論いただくが、次回は先ほどの日程で遅れないうちに総合計画の方にも反映いただく私どもの意見を提出したいと思うので、よろしく願いしたい。本日はありがとうございました。